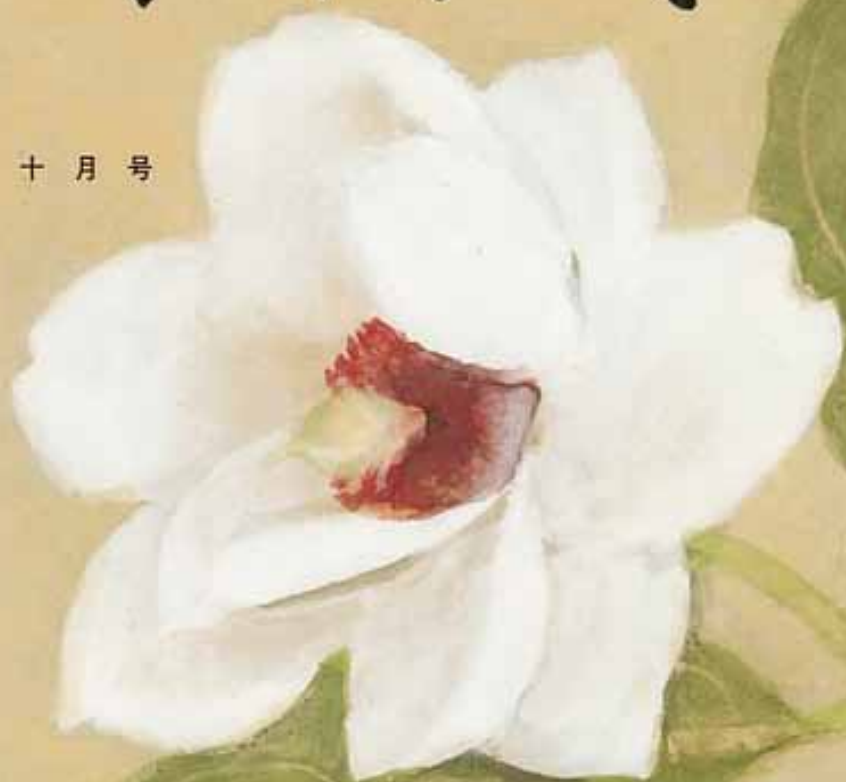


ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日印刷
昭和二十三年十月一日発行
第一二三号
第七号

ホトトギス

十月号



風雅の小筥〔三十三〕

廣太郎

以前、俳句は日本語の詩である、という事を申し上げた。勿論それは大前提ではあるが、最近、というより遙か昔からと言っても良いと思うが、その日本語の中に外来語が多く溶け込んでいる事も事実である。直ぐに思い浮かべる、言葉の一つとして「天麩羅」があるだろう。今では代表的な日本料理として海外の多くの人の好物でもあるだろう。元々は戦国時代に日本に來たスペイン、ポルトガルの宣教師が伝えた料理という事は有名な話である。語源についてはポルトガル語の「temptero（調理）」という言葉かスペイン語の「temptelo」、これは鳥獣の肉を食べるのを禁じられた日があり「天上の日」というそうだ。私はどちらかというの後者の説に近いような気がする。今はそれ程厳しくは無くなったが、カトリックでは復活祭の前の何週間かを「四旬節」と言い鳥獣の肉を断っていた。今でもこの間の特定された二日この日がある。その時に魚介類、野菜に衣を付けて揚げて食べたのだろう。

この号を読まれる頃はどうか判らないが、今年の新型コロナウイルスの問題で、その「ウイルス」という言葉は、私の子供の頃は確か「ビールス」と発音されていたと記憶している。どちらも「virus」と同じスペルであるが、前者はラテン語、後者はドイツ語である。確か以前医学用語はドイツ語で表記されていたのが、現在では英語である、という事を聞いた記憶がある。外来語に限った事ではないが、言葉は時代とともに変わってきているのである。

旬日記 汀子

令和元年十月十五日 菅屋ホトギス会

摘んで来し野菊に一と日家居して
ふり返る旅秋惜む心切

十月六日 下萌旬会

女王花三度蕾を上げはじむ
消息を聞きたるよりのそぞろ寒
かく陽気とどのはざるもそぞろ寒
初紅葉見過ごしてゐし我が家かな
旅をせし日のはや遠し秋の暮

十月七日 ロイヤル吟行会

平安の庭の水音秋の草
名園の芒の姿ありにけり
影あれば秋の涼しき順路あり
秋の蝶吹かるるままに紛れけり
秋涼の順路の影を拾ひつつ

十月八日 大阪倶楽部

名ある草名のなき草も秋の風
小鳥来てついでむものありし庭
転びしと聞きたる話そぞろ寒
誤字脱字なしとは言へぬそぞろ寒

十月八日 綿葉倶楽部

秋晴の約束されし朝かな
木の実踏みたる足音のついて来る
京の旅終へし秋晴なき朝
朝の間の秋晴信じ来る旅

十月十日 清交社

今日のこの晴れみそなはせ秋の空

松手入半ばに今日の終りけり
台風の予報刻々旅路あり
色鳥のきてある狭庭抜けて来し

秋の空明日の旅路を思ひをり
さつきまで快晴なりし秋の空
十月十一日 工業倶楽部

台風に一喜一憂して旅に
初紅葉より旅立ちの朝となる
台風は帰路とて一喜一憂す

十月十四日 西の虚子忌

ともかくも西の虚子忌の予定組む
東京に居て心には西虚子忌
体力の続く限りの西虚子忌

十月十五日 有恒俳句会

露踏みて山路深まりゆくばかり
恒例といへども山路うそ寒し
秋惜む心を笑顔もて対す
うそ寒しただ案じあるばかりとは
山深し小鳥の所在確かめず

十月十五日 無名会

見し目には野山の錦なりしかな
台風の足止め二日目に及ぶ
昨日逢ひ今日も会ふ会秋深む
長生きも元氣なればと西虚子忌
次々と被害広がるそぞろ寒

十月十六日 夏潮旬会

快晴の戻りし家居秋の行く
幾度も咲きしを告げて女王花
一応は予定通りに秋の行く

一つづつ過ぎゆく予定秋の行く
又一つ稿債増えぬ行秋ぞ
小鳥来よ庭の水音高ければ
十月十七日 クラブ合同旬会

文化の日近し一書を上梓して
十月二十四日 きさらぎ旬会

集ふことすなはち秋を惜みつつ
旅多きことなを心に秋惜む
小鳥来るこんなにかさきペランダに
健康に勝るものなし秋の朝

十月二十五日 時雨旬会

秋時雨などとはいへぬ吹き降りに
新米に一汁一菜てふ夕餉
秋の風邪とは言ひながら出掛け来し
十月二十五日 アネモネ旬会

雨少し小降りとなりて秋の暮
五日間重なる予定秋の暮
ふり返る人生ありて秋の暮
日の落ちて消えし小鳥の声いづこ

十月二十六日 年尾忌

この晴は授かりしもの年尾の忌
爽やかな一と日給はる忌日かな
十月二十七日 句会と講演の会

年尾忌の晴をつなぎて会一つ
被災地に心を置きて秋惜む
又一つ濟みたる行事秋惜む

十月三十日 摩耶山俳句大会

摩耶山の霧の予報をしりぞけて
ゆつくりと進んでをりし山の秋
摩耶の秋には会へる人会へぬ人

廣太郎旬帳

廣太郎

令和元年十月二日 三栄文化センター

千代田区を發ち港区へ小鳥来る
爽やかな出會ひは句座であればこそ
地下鉄を出て風の声秋の声
十月三日 蕉心会

秋の聲てふ風筋のありにけり
秋風と秋風聞き合ふ高さ
太陽と秋風聞き合ふ高さ
大江戸の空知り尽し小鳥来る
爽やかな風賑やかな工事音
鳴かと思へば芥秋の川
萩揺れて羽音散らしてをりにけり
十月五日 菅屋ホトトギス会

無花果やシユメール文字のやうに熟れ
秋惜む富士黒々とくろぐろと
キリシタン灯籠野菊叢に消ゆ
十月五日 新廣会懇親会

極上の神戸ビーチに秋惜む
十月六日 野分會菅屋例會

角切や勢乙女の衣装を乱れつう
檸檬食む乙女の顔を歪めつう
角切を終へたる鹿の虚ろかな
十月六日 青嵐會菅屋例會

河川敷露に沈んでゆきにけり
初孫の笑顔に秋思解きゆく
蘆原に水の退屈してをりぬ
移されし虚子の机といふ秋思
十月七日 カトリック新聞選者吟

案山子立つ借景として富嶽かな
十月十日 土筆會

昼の虫夜の舞台を仕上げゆく
子等の夢もろとも刈られ稲田に
庭園の過去を繕き末枯るる
十月十二日 岡山学芸會

再會の句碑颯風を離しゆく
うそ寒く素通りしたる無人駅

神杉の露けき歴史刻む
赤米へ五重塔の突き刺さりて
赤よりも白の矜持や秋薔薇も
秋蝶や古墳の主の化身とも
十月十四日 西の虚子忌

獨揺れに露けき堂となりゆけり
濡れ色を足して虚子塔うそ寒し
十月十五日 むさし野吟行會

昼の虫風編のレクイエム奏で
颯風を縫うて西への旅終へる
句座親し西の虚子忌を終へて
秋天を指呼に街騒遠ざけて
うそ寒く困はれてゐる武道抽
十月十六日 北國新聞選者吟

泥濘に露けき歩幅縮みゆ
十月十六日 登高會

虚子塔の天蓋として初紅葉
落鮎の山氣もろとも焼かれけり
赤米の穂並染め上げ秋日和
満天の星へと繋ぐ秋日和
落鮎の魂鎮めゆく流れ
十月十七日 第百千回記念倶楽部合併會

稲刈や車窓に富嶽近付けて
マラーの日少し曲聴くも文化の日
文化の日少し曲聴くも文化の日
十月十八日 廣邦會

吉備の国身に入彩の青さかな
白銀の前の彩り秋の山
十月十八日 前議員句會

今年酒召され白寿の躰鏢と
颯風の攫つてゆきし原風景
十月二十日 青嵐會東京例會

摩天楼玻璃白々とそぞろ寒
虫の音に公園の朝動き初む
犬を曳き犬に曳かれて秋うちら
秋薔薇散り際といふ輝きに
十月二十日 野分會東京例會

勢子右往左往角切大童
十月二十一日 朝日カルチャー若草句會

後の月大いなる忌を待つ横川
初紅葉續く古刹や彩の月り
初紅葉備前に出會ひ重ねたる
式部の実風禍に色を失はず
十月二十二日 若水句會

思ひ出の穴も残さず障子貼る
風禍にも水禍にも草の実の黙
草の実や神寿ぐものとし
泊雲と龍子の緑温め酒
木洩れ日に草の実雫輝かせ
十月二十三日 日異学園句會

檸檬の香島の空気を塗り替へて
余生てふ文字の重さや濁酒
濁酒丹波の杜氏といふ矜持
檸檬女む佳人表情崩さず
レモン添へメインディッシュの仕上り
魯田に大地輝くものとして
十月二十四日 徳源寺句會

天高し宇宙旅行は夢ならず
新蕎麦や信濃の災禍聞くにつ
蹟きて転びて仰ぐ天高し
十月二十六日 年尾忌

添水鳴る忌心といふ音階に
朝露の消えゆく利那れ合ひ
秋の蝶忌日の色の縫れ合ひ
十月二十七日 ホトトギス社句會

秋惜む日本の災禍案じつつ
秋惜む尾張に三田に鎌倉り
秋惜む丸の内から遠ざかり
十月二十九日 あいんクラブ吟行會

甲山粧ふ前夜の静けさに
十月三十日 一田虹色瓶挿毫

若水を汲んで明日へ又一歩
十月三十日 橋本くに彦 十月二十六日御逝去、悼句

年尾忌に悲しき忌日重ねたる

雑詠 廣太郎 選

瀧の上に天へと続く道のあり 神戸 和田華凜
 今生の闇を照して夏椿 同
 位牌抱く細き手首や夏の蝶 同
 夕暮は徐々に来るもの白牡丹 熱海 嶋田一步
 夕暮の影が先づ来て白牡丹 同
 白牡丹より日の暮れて来たりけり 同
 朝寝など縁のなき老顔洗ふ 相模原 木村享史
 毛虫より嫌な男が近くに居 同
 落花吐き出して鯉にも慌て者 同
 地の神へ枝垂るる花となりけり 静岡 須藤常央
 太陽に消されつつ野火走りつつ 同
 しやぼん玉だらけの空となつてをり 同
 明易や北の大地の彼方より 長岡 安原 葉
 もうぬない君の微笑み明易き 同
 来年は会へるかどうかライラック 同
 朝寝して再び夢の中になかな 加須 岡安紀元
 休みつつ登る薄暑の磴高し 同
 さりげなく催促されし祭寄付 同

一天は海原のごと子供の日 袋井 湖東紀子
 春昼や眠りの神の降りて来る 同
 雨上がる匂ひに夏の始まりぬ 同
 閉館と中止の文字や街薄暑 京都 山崎貴子
 幼子の寝返りの報こどもの日 同
 だんご虫ならば触れる風五月 同
 風光る川の流れは綾なして 龍ヶ崎 今橋眞理子
 風音の中の水音森五月 同
 十葉の白を重ねてゐる昏さ 同
 漁火を滲ませ烏賊の釣り上がる 神戸 山田佳乃
 玄海の無尽蔵なる烏賊の波 同
 おひねりの重さ軽さや舟芝居 同
 日々老いぬ少しばかりの草引いて 香川 湯川 雅
 街薄暑後めたさを曳く背中 同
 草笛や追ひつけさうで追ひつけず 同
 扱はれし御田四方より目覚めけり 同
 張り詰めし水面神待つ御田かな 神戸 涌羅由美
 守宮来て小さき闇の動きけり 同
 ひかるまで磨く黒板五月来ぬ 同
 灰色の空に希望の枇杷の色 同
 夏つばめダムの高さに翻る 同
 灌仏の御像の色の深みゆく 同
 仏陀とは人におはせし仏生会 同
 目の合へば守宮が首を傾げたる 同
 同 立村霜衣

雑詠句評（九月号より）

竿折れんばかりや風の鯉幟 長岡 安原 葉

白服に葉影波打つ並木道 香川 湯川 雅

白服・夏、六月の季題。

美しい緑の葉影にそよ風が吹いて波打っている並木道、その道を、白い服を纏った若い人が涼しげに、軽やかに、鮮やかな若葉の並木道を歩いて行く。

何とも涼しげで美しい諷詠句が生まれた。（とほ歩）

夏の日差を一杯に浴びて歩いている人が見て取れる。ひよっとして恋人同士が並んで歩いているのかも知れないが、どちらか、又は二人とも白い夏服を着ているのである。その白服に並木を透かして木洩日が、葉の影を服の模様のように映し出しているのである。白服の季題が輝かしく表現されている。（廣太郎）

端午の節句に男子の出世と健康を祈り、鯉をかたどった幟であるが、大空に靡く景色は見るものを大らかにしてくれる。お孫さんの鯉のぼりだろうか。山門の風は荒々しいかもしれないが、大空に泳ぐ鯉の如くに元気に強く育ってほしいと願わない者はいない。しかしそれも適度な風があつてこそその泳ぎであり、「竿折れんばかり」では見ていてはらはらするようでは竿を下ろしたくないこともあるだろう。しかし、だからといって下ろそうとは思わなかった作者。荒波だからこそ乗り切ることへの祈り心も高まつたに違いない。「竿折れんばかりや」の写生の中に、立ち向かう心も育つことを願っているであろう。（むつみ）

最近、子供の日が近付くと庭に高い鯉幟の竿を出す家をとんと見なくなつたが、筆者の子供の時は高い竿の上で鯉幟が泳いでいる姿は近所の家でもよく見かけたものだ。強い風が吹いて、勢い良く泳ぐ鯉幟の、その竿の撓みに着目して、子供の日の浮き浮きした気分を、季題を通して見事に描いている。（廣太郎）

天地有情

心子選

旅立ちぬ櫓の花の雲に乗り
 浄土いま比奈夫桜の盛りかな
 本鮪太平洋を知り尽し
 ボルドーを寝酒と決めて霜夜かな
 降り立てば焼野の匂ひ残る風
 一片の落花にもある静心
 心してひとりの虚子忌修すのも
 虚子忌六十回を回顧しひとり酌む
 鷺に少し遅れてほととぎす
 真夜啼いて天地揺るがすほととぎす
 歳月も牡丹も散り易きかな
 砲弾のやうな筈持たさるる
 母の日の電話の伝へくる笑顔
 武具飾るいたづら盛り遠ざけて
 草笛や小諸は虚子の俳枕
 セルを着て妻の支へがなくなれば
 重なりて触れる葉桜寂として
 名所とて葉桜となり人気なく

神戸 和田華凜
 同 稲畑廣太郎
 東京 同
 長岡 安原 葉
 同 相模原 木村享史
 同 鎌倉 星野 椿
 同 熊本 岩岡中正
 同 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 神戸 浜崎素粒子
 同 東京 河野昭彦
 同

高架下商店街も梅雨に入る
 草取も終へて家居の時余る
 はや日陰恋ひ春昼の庭であり
 母許へ帰京幾度花は葉に
 春光を全身に浴び深呼吸
 古巢持ち植木屋高きより下り来
 山荘の籐椅子にある週刊誌
 ダイアナといふ名の薔薇に立ちどまる
 杜若すがすがしさを胸に持ち
 お隣の紫陽花の色濃くなりぬ
 宣告に祈り深めん明易し
 家居して日々発見の庭五月
 つつじ山咲き広がりて径のでき
 つつじ山咲いて近道できにけり
 静心もて香を焚く薔薇の午後
 薔薇の香に心のほくけゆく会話
 土佐人や恙もなく初鯉
 風鈴の風を迎ふるさ揺れかな

神戸 三村純也
 同 袋井 湖東紀子
 同 東京 大久保白村
 同 同 高濱朋子
 同 吹田 大橋 暁
 同 宝塚 水田むつみ
 同 熱海 嶋田一步
 同 西宮 本郷桂子
 同 仙台 赤川誓城
 同